執念で復活の初V

日本グランドシニア覇者が
１０年ぶりのタイトル

《第 11 回九州スーパーシニアカップ男子》

～小郡ＣＣ

３オーバー　75

安河　正彰（ミッションバレー、81 歳）

まさに復活の九州タイトルだ。ちょうど１０年前の２０１５年に日本グランドシニア選手権を制した。それ以後は不運にも病気に見舞われる。帯状疱疹が左ひじに出て、左肩、腹部にも及んだ。「３年ほどクラブが握れなかった」。左手の握力は１８まで落ちる。それでも「何とかゴルフをしたい」という思いでグリップをオーバーラッピングからテ

ンフィンガーに変えたりもした。今は元のオーバーラッピングで握れるようになったが、寒い日などは血行が悪くなるせいか、体調が良くない。今大会も腹巻、サポーターやスパッツを履いて出場した。昨年は九州グランドシニアの福岡県北部予選に出場したが、予選落ち。「我慢してやっていれば、いつかいい日が来るかな」。その通り、いい日が訪れたのである。

インスタート。１４番までパーを並べた後、１５番で３パットボギーを叩くが、続く１６番のバーディーで取り返す。１８番をまたも３パットボギーして前半を３７で折り返す。後半のアウトは１バーディー、３ボギーの３８。３度の３パットボギーがもったいない。クラブハウスで待った結果、最終組の大嶋玄次（大博多）と７５の同スコアで並んだ。競技規定（年長者上位）により安河が３カ月ほど早く生まれており、初優勝のタイトルを掲げることになった。

「勝ったのは嬉しいけど、愛菜が合格すれば、もっと嬉しい」。愛菜とは同じミッションバレー所属でナショナルチームの一員でもある藤本愛菜のこと。安河が優勝した日は日本女子プロゴルフ協会のプロテスト最終予選の２日目。藤本は通算５アンダーで２位タイにつけた。まるで自分の孫がプレーしているような気持ちなのだろう。

ゴルフは福岡県宮田町（現宮若市）役場に勤務中の２５歳の頃に始めた。ゴルフの腕前が上達し、シニアのプロを目指し、５６歳で退職。ただ、プロの道は断念したが、インストラクターの資格を持つ。現在は「昼から毎日行く」と言う自宅近くの練習場「ベストゴルフチクホ」（宮若市）でクラブを握るのが日課である。「ゴルフはマナーが一番大事。みんなから信頼されるようになりたい」とゴルフに向き合う。

4年ぶり3度目V

衰えを知らない大ベテラン

《第 11 回九州スーパーシニアカップ女子》

～小郡ＣＣ

７オーバー　79

福井　和子（ブリヂストン、78 歳）

４年ぶり３度目の頂点。九州スーパーシニアカップ女子の部は２０２０年から始まったが、その年と翌２１年に優勝して以来の勝利。全６大会のうち半分の３大会でカップを手にした。「来年からは７０歳のプレーヤーがどっと入って来るので、取るなら今年が最後かな、と思っていた。優勝をさせてもらったけど、田中さんには悪いかな」。男子同様に女子も７オーバー７９で福井と田中惠子（愛野、７１歳）が同スコアで並んだが、年長者上位という競技規定により、福井が勝った。

アウトからスタートしたが、前半のプレーは良くなかった。６ホールでボギー。バーディーはなく、パーが３個。「ボールが上がらずにゴロゴロばかり。ボギー、ボギーで『えっ』って感じでした。休憩が３０分あって、そこで一つ気が付いたんです」。それは「体が止まっていたんです。寒さもあって体の回転がなかった」。後半のインに入ると別人となる。１２番でバーディーを奪い、１３、１５番でボギーとするが、１バーディー、２ボギーの３７。参加１９人中、ハーフのベストをマークした。

福岡県久留米市で息子さん夫婦が経営する「福井レディースクリニック」を手伝っていたが、昨年、ご主人とともに全てを任せて手を引いた。所属のブリヂストンＣＣでは女子の副競技委員長を務め、「誘われた時に行く」ゴルフを週１～２回。「この年になると、メンテナンスが大切」と体をいたわりながらプレーを続ける。

「ゴルフをするのはボケないためにいい。自分で判断して、自分でボールを打つ。自分で責任を持ってやらなければいけないでしょう」と健康のために高齢者のプレーを勧める。まだまだ気力も体力も衰えてはいない。元気が充満している。